

三河アララギ

平成二十七年

二月号

第六十二卷 第二号



ニューヨーク日記(100) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

November 28, 2014 : Time to get ready for Xmas

Blue Shoe Diaries



サンクスギビングがすんだら今度はクリスマスの準備開始! 今年はツリーなしです。でも雰囲気は欲しいからちょっと適当に飾っちゃいました。これ、去年買ったツリーの飾り。。。

Not getting a tree this year but Xmas decorations are up! Gets the mood right? Kinda, sorta? Now on to some Christmas shopping. Let the holiday stress kick in!

目次

第六十二卷第二号(通卷七三四号)

表紙 椿	ニューヨーク日記(100)	感銘歌 御津磯夫第十歌集	歌集「スモン」	冬の水門川	宝石銀河団	雪景色	シャンソン	玉蜀黍	晩秋初冬	吉日大安	年の瀬	漂として	純米酒	氷雨雪雜	わた帽子	冬うらら	折鶴	桜淵公園	マレーシア産	ユズリハ	マイカップ	冬日和	いよいよ冬が	新海苔	養漁場	『歴代天皇御製歌』	『ことよせ』	私の一首
------	---------------	--------------	---------	-------	-------	-----	-------	-----	------	------	-----	------	-----	------	------	------	----	------	--------	------	-------	-----	--------	-----	-----	-----------	--------	------

伊与田 伊藤 いはと 海屋資料館 白井 信昭 夏目 淑子 山口千恵子 小野可南子 平松 裕子 杉浦恵美子 半田うめ子 近藤 映子 森岡 陽子 富岡 和子 足立 晴代 清澤 範子 鈴木 孝雄 伊藤 忠男 安藤 和代 林 伊佐子 内藤 志げ 青木 玉枝 弓谷 久子 今泉 由利 岡本八千代 大須賀寿恵	Blue Shoe	今泉 由利
3030282726262524232221201918171615141312111098765421		

『俳句』

『俳句』	かさね吟行会 十二月	『酔いの徒然』(34)	ある自然科学者の手記(33)	絹の話(51)	物理学者と詩歌の世界(61)	短歌に詠まれた茂吉	楽しい時間(27)	石	『水魚』のことから(169)	ことのはスケッチ(434)	『歴代天皇御製歌』(三十三)	編集室だより(二〇一四年十二月)	和菓子街道(100)	お知らせ・編集三河便り・三河アララギ規定															
岡本八千代	清澤 範子	松本 周二	山元 正規	今泉 由利	川井 素山	小柳 美子	重野 善恵	田中 清秀	森岡 陽子	柳田 皓一	米田 文彦	和田 勝信	植村 公女	小池 清司	田中 清秀	丸山 醉宵子	大橋 望彦	今泉 雅勝	鮫島 一石	山本 紀久雄	夏目 勝弘	岡本 八千代	今泉 由利	貫名海屋資料館	三河アララギ	平松 温子			
(31)	(31)	(32)	(32)	(32)	(32)	(33)	(33)	(33)	(33)	(33)	(34)	(34)	(34)	(35)	(35)	(36)	(38)	(40)	(42)	(44)	(46)	(48)	(50)	(51)	(52)	(53)	(54)	(55)	(56)

感 銘 歌

御津磯夫第十歌集「御津磯夫歌集」

故もなき嘆きしをれば引馬野の夕映え空は雲の風紋

P 152

病ならぬ齢に負けて横たはりけふ一足も土踏まざりき

P 158

歌集 「スモン」

大須賀 寿恵

しもやけの足に今年は痒みありわれのスモンの癒ゆる兆か

どの家にも昼の灯のともりゐて寒に入る日の雨降り続く

原因のなき不安感持ち続け夕べ炬燵に吾子と寄り合ふ

冬の水門川

蒲郡 岡本八千代

われもまた百代はくたいの過客かかくのひとりかな今日のせせらぎの静かなる音よ

川上より伊勢の方へと流れゆき水よそのまま返らずにして

芭蕉の旅むすびの地なる船町の渚に映るわれらの姿

船町の川湊かはみなとにかかる赤き橋住吉橋を今か渡らむ

柳藻の冬のみどりの淡みどり伊勢の方へと流るる如し

今日在りてあしたあしたも愉しかる水門川のせせらぐ音よ

柿食へば「蒂へたのところが渋かりき」思ひ出しつつわれのたのしさ

「柿くひて猿にかも似る」などの歌ああ竹の里人子規といふ人

買ひて来し熟柿ずくしの赤き皮をむくしみじみとして侘びしきごとく

久ぶりに東京の曾孫に電話せり「Merry X'mas Happy New year」

宝石銀河団

東京 今泉由利

くじら座の方に宝石銀河団96億年を隔つるひかり

星々が次々誕生していると宝石銀河団の方を向きをり

海底にありし礫質土壤にて今は美味しいぶどうの稔り

赤き実は鈴成りにして南天の大きひと枝担ぎかゆかむ

ころころと南天朱実のころころと小さき音する私の部屋

クリスマスホーリーの赤南天の赤一粒一粒太陽を持ち

この年と来る年との接点は寝^{いね}たるままにやすやすと越へ

諸々のもの見えそむる初明り始むる始めむ新しき年

新しき年のはじめを心していよよ華やき過ぎ^ごさむことを

くるくると渦巻落つる追羽子に思ひを馳せるブラックフォール

雪景色

豊川 弓 谷 久 子

ごうごうと空唸らせる風の音大荒れ天候何時まで続く

これがまあ終の住家かと一茶の句心に浮かぶこの雪景色

雀等は何処ぞ置きしパン屑の台にも深ぶか雪積もりをり

子と我と飼猫二匹ほつこりと日向ぼつこの日向の縁

太陽を束の間よぎり流れ行く雲の白さよ空の蒼さよ

この夏の旅の思い出関ヶ原古戦場が載る今朝の新聞

三成の無念を思いて佇ちをりき笹尾陣跡夏草踏みて

「西軍がもし勝ちゐたらどうなった」新聞見つつ子に問ひて見る

石路の葉も凍らせて今朝の冷え正月寒波真近に迫る

はやばやとしめ縄を子に飾らせむ新年迎へむ何は無くとも

シャンソン

新城 青木玉枝

運命さだめとは私にとってなんだろう残り世の日びせめて安らに

朝の日課とどこおりなく終へて立つ玄関よりの山並の雪

人生の流れはそれぞれどうなるの仏の亡夫つまに問ふてみる朝

イヴを待つツリーも部屋に飾られてサンタの背負オオブクロふ白き大袋

荘に入ればサンタのプレゼント胸にしてエビス顔なり老いゆく日びを

この時世独居の部屋はテレビなくカセットラヂオと仲良くひと日

流れ出るメロデーに数かずの昔なつかしシャンソンを歌ふ

老いと言ふ侘しき文字を書いた後若い若いと何べんも書く

泣くもよし笑ふも怒るも味はいて手を合わせ祈る日びおだやかに

玄関に手をかざし見る夕茜師走の山里静かに暮れゆく

玉蜀黍

豊川 内藤 志げ

凍りたる玉蜀黍を残さずに抱きて帰る家敷の畑より

早速に皮を剥がしぬ芯までも凍りて堅し玉蜀黍を

とにかくもわれ等も鳥も食み終る師走の始めに玉蜀黍を

一花を大きく咲かせし向日葵に明日の霜の寒さの予報

散歩より帰りの道は階段を登れば近し数して登る

朝より雨となりたりストーブを夫を頼みて部屋に持ち込む
あした

大鍋に大き小さき分け入れて人参芋をストーブに煮る

昼までに藪の日向を歩まむと雪なき所を選びて歩む

沙羅の木は皮を剥ぎつつ冬の木に淡き茶の色新らしい色

雨の日を炬燵に入りガラス窓時をり鶉の横切り素早し

晩秋初冬

岡崎 林 伊 佐 子

晩秋の山に登りて櫓の木のもみぢを散らす山おろしの風

葉を落とし骨格さらす冬木立ぬくとくもあるか木もれ陽さして

帰り行く古里ありて有り難き昔のままに家屋のこれり

ふる里の緑の空気吸ひながら山道のぼり散歩たのしむ

暮れ残る寒空の下に戸を閉ざす隣家もさびしき草むらの中

子供等の姿も消えた過疎の里老いたる人が村を守りぬ

離村して町に住みきて四十年逝きたる友も病む友もいる

農の手は悲しき夜盗虫捕殺する野菜育てる自然栽培

いつもより早く目覚めし午前四時ペンを走らす至極な時間

畑仕事山仕事をして健康を保ちて行きぬ老いし二人は

吉日大安

豊川 安藤和代

快気祝師走吉日大安に配りて夫はさわやかに笑む

ゆつくりと散歩の夫に付き添えば師走の風も寒くはあらず

居てくれる唯それだけでそれでいい夫と見る庭の千両あかい

風呂好きの夫の背をながす時幸せいっぱいあふれてきたり

枸杞の実と千両万両ピラカンサあかアカ赤でクリスマス来る

「ただいま」の響ける声よ成績の上りし孫の放つ輝き

孫は今成績表を母の前遺影はさらにほほ笑みて見ゆ

下宿する孫に電話を「出られません」心配安心混ざる一日

孫のおさがりブーツでルンルン七千歩スーパーまでの朝を楽しむ

好物は南瓜でありし祖母偲び冬至の南瓜ことと煮る

年の瀬

大阪 伊藤 忠男

宵闇の迫る岸辺に咲く小菊月の明かりの無きが悔しき

年の瀬に過ぎしあれこれ惜しむ日々来る年いかにといい巡らす

風に揺れしなる小枝に凍る雪耐えてこそ咲く山茶花の花

寄りにより吹雪追いかけて北の国何で来たかと歎くこの年

身動きを取れぬ札幌北の宿ストーブ抱えただ待つのみか

札幌を出でてこの日は高松に寒さ一息それも叶わじ

風吹けば瀬戸の大橋渡れない札幌四国繋ぐ北風

風吹けば止まる列車に四国への行く道断たれ成す術もなし

あれこれと慌ただし年暮れて行く疲れピークかただただ眠し

この年もあと僅かなり除夜の鐘鳴り始めたるまどろみの中

凜として

沼津 鈴木孝雄

大輪の花を咲かせる皇帝ダリア丈長すぎて支えられ立つ

昨夜来の大風止まず鷺頭山紅葉飛び散りすっかり冬に

いつまでもあると思うなこの生命山の紅葉も一夜で散りぬ

自転車を止めて見上げる冬の空プラチナのおおいぬダイヤのオリオン

夕暮れに急ぎ巣探す鳥数羽越冬ツバメか風邪を引くなよ

メトロ出で飛び込むヒカリまたヒカリ銀座は今宵も煌めきの街

犬忘れスマホに夢中のお嬢さん手綱引かれどフリック続く

霜降りて葉物野菜は萎れるもネギはまつすぐ凜として立つ

巻きだした白菜の葉にようちゅうが小さな穴開けレースを作る

包破り伸びたるつばみ膨らみて今まさに咲かん白いスイセン

純米酒

春日井 清澤 範子

予算思ひ今夕献立考える安き野菜を多めに買ひて

純米酒人肌に温めて夫は呑む三日に一度の楽しみとして

喫茶にて娘と座り向ひ合ひ吾の生きし事しみじ言ひて

夫が雨戸締めつつそつと吾呼びて東の月がほらまん丸と

堤防の桜紅葉は散り落ちて細き川面を流れ行きたり

堤防の桜紅葉は散り積り師走の風に舞い上るみゆ

茂りたる青木の枝を切り払ひ清しくなれり見通しもよし

吹く風に庭の落葉を拾ひたり隣の家柿の紅葉も

五六枚残りし桜の紅葉を楽しみ惜しみ今日の散策

隣の家柿の木に三ッ残りゐる赤き実朝陽に映えて光りぬ

氷雨雪雜ゆきまぜ

東京 足立晴代

風そよぎほのかに漂う菊の香に小春日静かに暮れ行きぬ

立秋過ぎしこの日頃束の間の静寂珍らしさかな

津々浦々数多の悲報次々と心痛めるばかりなり

舞の道ひたすら歩みし君なるに求めし人に会はれし吉事

二人して歩みゆく道遠けれど越ゆる山坂愛と認待

赤白椿咲き乱れ晩秋迎えて歩む道沿ひ美しきかな

大木の緑の葉陰はかげまろ丸き実の陽かりを受けて輝きぬ

木枯らし吹かずと思ひしに氷雨雪雜ゆきまぜ予期せぬ嵐が

世の中は玉ゆらの如く移りゆく流れの間々に過す日々なり

四方の海囲まれきたる日の本の恵みの幸に感謝するなり

わた帽子

東京 富岡和子

苦心せし原稿投函おえた朝となり駆迄気まゝな散歩

わた帽子丸葉の影に見え隠れ小さく光る辛夷こぶしの蕾

教え受く剪定たしか早咲きの椿の落花レッド絨毯

呼気しづめ蝸螂かまきりゆるり日溜りに初雪の日の枯れ葉造形

大東の東北エイド青菜の黄料理の前に花見たのしむ

夕陽うく数多積まれし夏みかん電飾ツリーは足許にあり

大都市も冬將軍の到来で冬至を前に主婦のとまどい

浅草寺羽子板市へ今年またテニススケート王者の役者

目移りす百花繚乱デパ地下に求めし品はいつも焼そば

ちから入るガラス戸網戸明らかに朔旦冬至さくたんとうじの語句を知りし日

冬うつら

東京 森岡陽子

羅漢寺の五百の教えに感銘も悟れぬ我は心切なし

奥多摩で出会った犬の計報聞くころころのそのそドン安らかに

夕蔭に仕舞い忘れし干した傘冷たくなりて次の日又干す

冬うららオフィス街でランチするサラリーマンに釣られて早喰い

蝶に見へ人には見へぬ色ありて蝶は春よと恋の囁やき

テークファイブ深夜ラジオから曲聞へ青春時代のあのジャズの店

公園の角のお洒落なカフェテリア高さ五段のバーガーに見とれる

どの犬もモデルが如く衣装つけ木洩れ日のもとカフェに寛ぐ

師走時雑巾片手に窓掃除毎年思うは細に拭こうと

鴉減りめつきり増ゆる鶉鳥は我が物顔なりひいよひいよびい

折鶴

名古屋 近藤映子

早や師走ベランダ歩く亀二匹大小連なり日だまりに

師走なる朝夕の冷え身に沁みぬベランダの亀もガラス戸に寄る

右の手のわずかな力も弱り来て文字書く時は思うにまかせず

わが夫の先輩先生より電話の声九十才に成った話す

ああ夫の先輩神田先生の元気なお声九十才になれたと

あきらめず指先動かす日々よ折り鶴だけは続けたり

昨夜より降りたる雪は九年ぶり二十五糶も積りたり

時折に朝方夫を見舞う夢さめれば今は行く処なし

筋無力症は甘くなし私の自由をうばい続けるか

軽ろうじて折鶴作りは続け居りこの文字書きも何時迄続く

桜淵公園

新城 半田うめ子

桜を守る桜淵公園^{フチ}にぎやかに友と来たりて散歩するなり

庭野にては村芝居に出でし孫の香^{かな}香上手なりて楽しみたりき

わが父の家に来たりと友人はたばこを吸ひたり赤を贈りき

塩瀬のオフジ様常々に梅干しを下されしやさしかりけり

表彰の幾枚かを頂きて半田せつ子は幸せでありし

西川の辺を楽しみつ散歩する大きな魚のそよぎあるなり

マレーシア産

蒲郡 杉浦恵美子

二ヶ月間毎朝馴染んだこの味はマレーシア産ブレンド紅茶

宮崎は教へ子遠く嫁ぎし処白葱一束ふと手に取りぬ

父が弾くピアノの横に小さき母微笑みて立つ我がまぼろしに

我が家からピアノ去りゆき父母の思ひ出ひとつ消えて行きたり

然は云へど未だ手放せぬ物多し思い出すばかり切り捨てられぬ

時として終日籠れば友からのメールにて知る宵越しの雪

さう云へば昨夜は早めに寝入りたり一晚雪が降るのも知らず

勤めなき身なれば外の雪景色ほうあれまあと眺むるばかり

ボランティアの論語素読に我も倣ふ足利学校方丈の一問

何時の世も学びの庭は敬虔になりますまして古びし足利学校

ユズリハ

豊川 平松 裕子

今しがた清められたるかこの坂を登りつつはつか心ひるみぬ

古き名は大門坂と呼ばれゐて今その坂の名を言ふ人のなし

探しゐる松もユズリハも未だなくお鋤様より秋葉様に下る

秋葉様より稲荷様へとユズリハを探しあぐねて道をそれてみぬ

やうやくにユズリハ一本ひともと見付けたり枝もつけざる稚木にして

根より掘り持ち去らひむかと思ひしもほどなく止めぬここに育てよ

ユズリハにもウラジロにも意味あるを教へし人は今年逝きたり

山の獣の鳴きゐる声かと立ち止まる竹と竹との触れて立つ音

氏神様お鋤様秋葉様お稲荷様と下りて雄松の一枝も得ず

今年また師よりの注連縄届きたり師は健やかにおはしますらむ

マイカップ

豊川 小野可南子

秋ジャガを堀り上げてゆく足元にホトケノザなり愛らしく咲く

人參の若き緑葉そを覆ふ冬草たくまし指に引きつつ

泣きながらトップを走るローちゃんその脚力は確かなるもの

見守り隊の小母さん我ももらい泣きガンバレガンバレ繰返すのみ

南天の赤実つひばむ鴨と窓拭く我との視線がからむ

窓ガラス拭きゐる我の視界暗め通り過ぎたり一羽の鴉

先だちて歩める鵲鵲首かしげ何かを思ふ仕種とも見ゆ

両の手に包みて今朝のマイカップ緑さやかにかほりたつお茶

庭石にあたりて小さき火花散る手鋏せはしく草を掻きゆく

正月の華にと囲ひし千両の赤実は終にひよどりの嘴

冬日和

豊川 山口千恵子

冬日和を喜びながら玉葱の苗を植ゑたり二畝うねばかり

二百本の玉葱の苗の弱々し一本一本ていねいに植ゑる

軒下に吊りて保てる玉葱に青き芽出づる例年の如く

冬枯れの庭に青々生ひゐるは黄の花鮮やかなりしリコリスの葉

十二月ダチュラの白き花咲きぬ微かに甘き香りのしつつ

虫喰ひの豆の多きを取り除き策一杯の大豆を得たり

休耕田の大豆の収穫忽ちに終へて行きたり大型機械は

かすかなる香りのしつつ搗き上がる今宵は炊かむこの新米を

ほのかなる香りのしつつ艶つやと新米炊きぬ炊き上がりました

天空の白き三日月めざす如飛行機雲はまっすぐ伸びゆく

いよいよ冬が

豊川 夏目勝弘

墓原より里に下る木暗き道千両の赤き実目にたちてきぬ

両側に植ゑしごとくに千両がなかに一株きいろがありぬ

墓原を下りし所のあの家の黄の千両が運ばれきしや

峡の田のなかを直ぐにのびる道縄手をなししを歩みみたかりき

両側より道を狭めるセンダン草茶色になりしまなかを歩む

私の背を押して歩みを助けくるる本宮山より吹きおろす風

墓原に続く道の雪深しひたすら直ぐなる足跡残す

ナンテンより雪の落ちたり上下まだ右に左に大きくゆるる

水道に凍結防止を施して雪に足跡残して帰る

ワラの香を部屋に満せし十二月あと一日にて、縄作り終ふ

新海苔

横浜 阿部 淑子

冬至の夜湯船に浮ぶ柚子の実を引き寄せ願う健やかな身を

師の君の御心深き教導に「風の称号」お老い甲斐の夫つま

寒中のきびしき業わざに育はぐくまれ新海苔誕生画面より香る

冬至の気圧配置となりぬれば見上げる木々に一葉とて無し

クリスマス輪になり回すプレゼントルーペが我が手に前途拡がる

養魚場

豊川 白井 信昭

堤防の土手のもろ草刈り取られ沿いて歩めば草の匂いす

養魚場夜ともなれば皓々とナトリウム灯の明りは映えて

満月の今宵明るき養魚場滾たぎちを聞きつまわり道する

汲み上げし小屋はこの畑の中なりき滾を聞きしも遙かとなりぬ

引馬野の地下深く水汲み上げる鮎の養魚場水のかれなで

「歴代天皇御製歌」(三十二)

貫名海屋資料館

『花山^{かざん}天皇』第六十五代・在位・九八四年(十七歳)―九八六年(十九歳)

花山天皇は、冷泉天皇の第一皇子。藤原兼家の謀略により十九歳で讓位となり翌日出家。入覚と号せられる。その後諸国に旅を重ねられた。

熊野古道、中辺路、大阪本王子と近露王子の間の箸折峠に、牛と馬にまたがる「牛馬童子像」は花山天皇を表わしたものとされる。

「この世をば我が世とぞ思ふ望月のかけたる事も無しと思へば」と藤原道長の父兼家が摂政になる際、花山天皇は退位させられた。

旅の空よはの煙^{けぶり}とのぼりなばあまの藻塩^{もしほび}火たくか^もとや見ん (後拾遺和歌集卷第九)

石走る滝にまがいて那智の山高嶺を見れば花の白雲 (夫木抄 四)

補陀洛や岸うつ波は三熊野の那智のお山にひびく滝津瀬 (那智での修行中)

『いっしょに』

(西浦公民館 いーはとぶ)

野良犬の我を見つめるうつろの目やがて捕獲の運命さだめも知らず
一杯のドリップコーヒ―に満ち足りて入笠山頂にゅうがさの絶景望む

水野 絹子

杜子春の馬の役なるわが孫は暗転の中迫真の演技

静かなるやさしき暮し望みたし思ひつつ今日も畑に出でゆく

牧原 規恵

夫と来し小雨にけぶる段戸湖の水面に映る紅葉が揺れる

前方に鈴鹿連峰見え隠れ23号線よ孫の家近し

稲吉 友江

集ひたる今日は友らの顔顔顔出合ひつつ過ぎてはや半世紀
今日来たるモネの池面にただ一つうすくれなるの睡蓮の花

鈴木美耶子

夫と共に四十年の時過ぎて石は「吉祥石」墓地の改築

この家で八人暮らししてましたただただ寡黙の時もありつつ

吉見 幸子

それぞれに古りて納まる金剛杖満願となりしか奥之院に積まれて
山の夜気ひろびろ廓に流れくる障子一枚のわが宿坊にも

牧原 正枝

黄色の葉赤い葉が手に届くほどに「キララの森」は真つ盛りの秋
ラジオから「桜貝のうた」聞こえる我もおのづとくちずさみつつ

岩瀬 信子

風の吹く日も近し犬小屋にマット敷きやるわが家族かな
歩くたび鈴の音が鳴る亡夫の鍵今日も鳴りをり吾のポケットに

石田 文子

鴨か雁か数多の鳥の渡り来し冬あたたかな今日のみ空に
予期もせず我は仕事を受けてよりいと慌ただしこの雨の朝よ

森 厚子

年ごとに兎らの語りし言葉ふえ拾ひ読みし日懐かしきかな
落葉おつ音におどろき草取りの手を止め見入る風に舞ふさまを

山崎 俊子

ほつぽつと白き山茶花花咲き初めて吾に吹きくる今年の木枯らし
石路の黄花きいひとつと咲きゐたり氷雨そぼ降る草蔵寺の庭

三田 美奈子

私の一首

「足早に巡る季節ももう秋か静かに実り待つはずなのに」

伊藤 忠男

天変地異に見舞われた今年も終わる。静かなはずの秋も予期せぬ御在所岳の噴火に茫然自失、その被害に目を覆うのみ。阿蘇山も長引くのか。新年はなんとか穏やかな年でありたいと祈るばかりである。

大きな雷が家の上にて鳴りをりぬ恐怖のあまり何も手につかず

伊与田 広子

この日は祇園祭りの日ではじめは花火かと思っていたがだんだんと音が大きくなり雨の振り出し雷は判る。雷雨はますます烈しくなった。

秋の夜の一夜一夜がすぎてゆく何をかおもひまた怒しつゝ

岡本八千代

秋の夜長が一夜一すぎてゆく。その夜、その夜、いろいろなことが浮んでくる。歳を重ねてきた私は、「これからは、心優しいおばあさんになりたい」と思えてきた――。

この「怒す」という字は、漢和にも「思ひやりの心」とあったので、今の自分のもちたい心と一致してみたんだから、一首にした。

「何をか」は、何をかでもいいのだが、何の下に「ヲ」をはさみ入れて、文語調にしてみた。優しい心が続けばいいがと思っている。

母の歳より四年も越えて吾は居る塩サケ入る白菜汁母の味の

清澤 範子

平成二十六年十月号より

母、今居ませば九十七歳、私が十歳の時父と死別しそれ以来、和裁の先生からJAの購買部、信用部と職を替へつつ女手一つで四人の子供を育ててくれました。物資のない頃今思えば大変なことに感じ入ります。私が足助香嵐溪のほとりの県有林事務所に勤めていた時体調をくずし床にいた時見舞ってくれ、塩サケ入りの美味しい白菜汁を作ってくれました。気弱な私に「あなたが女の子で良かったよ」と励ましてくれた母。今の私は氣持を強く持ち最善を尽くして家族と共に生きる事。

これが亡き母への恩返しと思ふ今頃です。

『俳句』

大阿蘇の外輪山や柿すだれ

松本周二

時雨るるや明日香に黒き石舞台

雨よりも風の冷たき和紙の里

山元正規

雷神の嗽のごとき冬の雷

大根の千に満たない千六本

今泉由利

生きてゐるオリオン星座のその下に

杉桶の風呂になじみて十二月

川井素山

幼児を高い高いの冬日和

梟の何を射る目ぞつながれて

小柳千美子

ひとむらの冬青草の光かな

茶を淹るる手の皺深き師走かな

重野善恵

裸木の影の際立つ夕日かな

買物をひとつ忘れて日短か

田中清秀

雲間ひに富士の峰あり枯芒

サイレンと犬の遠吠え冬の夜

森岡陽子

冬の風残る銀杏匂ふ路地

逢ふ人を想ひセーター被りたる

柳田 皓一

山茶花のくれなる散りて重なりぬ

山門を額縁として冬紅葉

米田 文彦

おみ足に届く冬の日聖観音

遠近の三本締めやお酉さま

和田 勝信

マフラーの人混み動く浅草寺

父も来て二度の紅茶や暖炉燃ゆ

水原 秋櫻子

大根を抜くたび富士と目が遇ひぬ

森岡 正作

足跡を盗まれてをり六つの花

植村公女

言ひ過ぎを悔みてをりし冬林檎

生き延びて12月8日又向う

見上ぐれば空の深さや冬木立

小池清司

仏殿を作務衣の走る十二月

冬の鴟梢で夕日吞む気なり

蒟蒻玉ころがしてある入日かな

黛執

日向ぼこ平等院を借り申す

中野柿園

寒雀身を細うして闘へり

前田普羅

かさね吟行会

「小石川後樂園」 十二月

田 中 清 秀

平成二十六年十二月二十三日、本年最後のかさね吟行会を小石川後樂園で開催した。参加者は松本周二、川井素山、山元正規、柳田皓一、今泉由利、森岡陽子、小柳千美子、重野善恵、山迫京子、と筆者の十名である。今回は集合時間を決めずに各自独りで吟行を行い五時に涵徳亭に集合し句会のあと忘年会を開催する趣向である。

ご存知のようにこの公園は水戸藩の中屋敷（後に上屋敷）の庭として二代藩主光圀の代に完成を見た。明の儒学者朱舜水の意見を取り入れ中国の教え「天下の憂いに先だつて憂い、天下の楽しみに後れて楽しむ」から後樂園と名付けられている。冬の日暮れは早い、さらにこの日は生憎の曇り空で冷たい北風が吹き園内には来園者も少ない。ただ、中心にある大泉水には蓬莱島の大松の雪

吊りが暮れなずむ池面に一本見事に映し出されていた。そして、弧巻きの松が並び水鳥が静かに水尾を絵描きながら優雅に泳ぐ様はさすがに天下の名園の貫禄を感じさせる。

ありのままの俳句持ち寄り年忘

京子

枯木立暮れ残りたる水鏡

陽子

蓬莱島に鴨の陣敷く一处

正規

雪吊の鵜の首むすび暮れ残る

千美子

この地は小石川台地の先端にあり昔は水を神田上水から水車で汲み上げて流していたという。また、園内には蓬莱島と徳大寺石を配し琵琶湖を表現したという大泉水、一面をオカメザサでおおわれた円い築山の小蘆山、水面に映る様子と合わせると満月のように見える円月橋など、随所に中国の名所の名前をつけた景観を配して中国趣味豊かなものとなっている。すでに紅葉は散り、散

策の足元には枯れ葉が積もり、僅かにツワブキの枯れ花
やナンテンの実、千両の実が冬景色に彩を添えている。

夕ましの微かな風に散る紅葉

清秀

半月橋に山茶花の色濃かりけり

善恵

散りそめてなほ色残る石落の花

皓一

庭園は秋の紅葉、冬の雪景色、春には樹齢六十年の枝
垂れ桜や愛宕坂のシヤクナゲが綺麗に咲き揃い四季を通
して楽しめる。合わせて写生会や野点の茶会など様々な
催しが行なわれている。また、文化財保護法により特別
史跡と特別名勝に指定されている全国で数少ない公園で
もある。

午後の日の長く伸びきて日向ぼこ

由利

寒禽の声の止む間の鹿おどし

素山

雪吊も松も夕日に輝けり

周二

涵徳亭は入り口近くにあり本年最後の俳句会に相応し
く由緒ある料亭である。ここより夕景の庭園を眺め、来
し方を振り返り更なる俳句の研鑽と上達を期して、各々
亡き喜仙主催への献杯をおこなった。この一年句会と吟
行会大変お疲れ様でした、良いお年をお迎え下さい。

■かさね吟行会■

日時 2015年2月24日(火)

場所 小金井公園

集合 武蔵小金井駅 10時

申込 森岡陽子宛 (03) 3712・2835

『酔いの徒然』（三十四）

丸山 酔宵子

『三柱鳥居（みはしらとりい）』

「祇園の山鉾はノアの方舟が起源？」「モーゼは石川県に眠っている」「キリストの墓が青森にある」など、「日ユ同祖論（日本人はユダヤの消えた部族の末裔）」が昨今まことしやかに流布されている。

その一つを検証に、昨夜北新地で痛飲し未だ酒の残った翌朝、京都広隆寺に向かつて嵯峨線で東映時代村のある太秦へ。平日の秋晴れの午前中は人影も少なく、綺麗に掃き清められた境内の紅葉が、秋の優しい日差しに輝いている。広隆寺は地名を冠して太秦広隆寺とも呼ばれ、聖徳太子信仰の寺である。平安京遷都以前から存在した京都最古の寺院で、右手の薬指を頬にあてて物思いにふける姿が有名な国宝彫刻第一号「宝冠弥勒」が祭られて

いる。

広隆寺は帰化人である秦氏の氏寺でもあり、堂内には秦氏夫婦像も安置されている。秦氏は、中国から持ち込んだ養蚕製絹の専門技術で富を築くのだが、その「蚕」に感謝して、太秦の地の木鳥坐天照御魂神社（このしまにまずあまてるみたまじんじゃ）に奉祭した。それが、俗に「蚕の社」と呼ばれる養蚕神社で、広隆寺から徒歩5分の静かな住宅地の一角にある。

大きな鳥居をくぐりその奥へと進むと、鬱蒼とした木立が広がっていて、あたりが急に薄暗くなる。と・・、突如、眼前に「三柱鳥居（みはしらとりい）」が現れたのである。常識では2本の柱で出来ているのが「鳥居」であるが、この鳥居は3つの柱を組み合わせた特異な形で、真上から見ると三つの鴨居が正確な正三角形を描くように3本の柱が配置されているのである。

実は、秦氏は唐の景教太秦寺（ゾロアスター寺院）の

原始キリスト教徒で、三柱鳥居は三位一体「父と子と聖霊」を表現しているというのである。

さもありなん……。義経チングスハーン説もあることだし……。よし、まだ帰るまで時間があるし、と鞍馬寺まで足をのぼす。鞍馬寺は京都盆地の北、豊かな自然を残す鞍馬山の南斜面に建っている。鞍馬寺は牛若丸（源義経）が修行をした地として有名で、今、将に紅葉が真っ盛りである。

出町柳駅前から叡山電鉄に乗って、貴船を経由して鞍馬寺まで。京都国際会議場を過ぎ、閑静な住宅街を過ぎると二両連結の窓の広い観覧車風電車は、紅葉のトンネルの中をゆっくり上ってゆく。この季節、夜間は紅葉のトンネルがライトアップされ、車内灯が消さされて、幽玄な世界が演出されるのだそうだ。

残念ながら今日は夕刻までに東京に帰らねばならないので、もう一泊は断念せざるを得ない。小春日和の昼下

がり。紅葉に包まれたせせらぎが眼前に広がっている。そうだ、こんな機会は二度とない。折角なので貴船で紅葉を見ながら一杯と行きますか……。

川面澄み紅葉且つ散る貴船かな

酔宵子

ある自然科学者の手記(33) 大橋 望彦

「人の情を知り父の戦死を聞く」

情は人の為ならず、と申します。大七呉服店は父の存命中、屋敷へ出入り致し、多少は目を掛けた恩義に感じ、どん底に落ちた私共一家を哀れに思い、救済して呉れたので御在いましょう。大七の持ち家に移り、半年振りに見る懐かしい故郷、どんなに悦ばしかったかは、想像にお任せします。

其の上何呉となく大七が親切に世話をして呉ますので、私の家にも再び花咲く時が来た様に思われました。或る時、和田柳蔵と申す人が参りました。この人は、祖母の縁故のある人で、亦、父の烏帽子親になられた方であります。この和田様から父の戦死の模様を、初めて詳しく伺う事が出来ました。

越後口から攻め上った薩長の大軍を、城外名子屋町長命寺でくい止めようと、佐川宮兵衛を総大将として、八月二十九日の朝未だきよりん、激戦が起きました。会津城下の戦争では、この戦いが一番多人数の激突であり、

亦一番激しかったので御在います。父は一方の大將(書物には軍監という役名が書いてあります)に選ばれまして、御城をでるとき殿様からお別れの御盃を頂戴し、脇差を用いて斜めに切った半紙へ

数ならぬ 身にしはあれど ちりて後

花よと 誰か みよしの、山 重光

と、一首を認め、従兄弟の荊瀨の許へ送り、其の身は洋服を用いて(会津藩士の中で洋服を用い始めたのは山川大蔵様と、父の二人であります。亦、鉄兜も着せず陣羽織丈を着け、先祖伝来の太刀を腰に致し、京都勤めの時畏くも至上より賜りました采配を手には、兵士を下知して、勇ましく戦場へお出ましになりました。が何分激しい戦い、雨の降る様な弾丸の為め、四つ時頃(今の午前十時頃)三箇所に銃傷を負い、人の肩に担われて御城へ引き揚げ、手当てを受けられましたが、中々深手で、快復は覚束ないと思われました。

然し、剛毅な父は、勇気を落さず心も確かで、和田様を呼び、『私はとても助からぬ、後の事を宜敷く頼む。家族は北の方へ落ち延びたと、仄かに聞えたが、定めし分家を頼って参った事と思われる。分家には十四・五歳

の男子か居る筈、これを養子とし、光子と配偶は世家系を立てる様頼む、亦、これなる刀は家代々伝わった品故、お渡し下され。』と云い残し八つ時頃（今の午後二時頃）遂に二十九歳を一期として哀れ果敢くも、身罷り給うたので御在います。その枕辺には下平の伯母も居り、色々看護して下さったそうで、遺骸は五つ布布団に包み城中の空井戸へ埋葬しました。

その折り、出入りの大工が煙草と卯とを携え、城中に父を見舞いましたが、既に身罷った後でしたので、大いに落胆致し、この上は詮めて、ご家内様方の在り処を探し此の事をお知らせ申したいと、和田様へ申し出たので、和田様もその実意ある心底に感服し、『北方への御落ちなされしとの事故、是非お尋ね申して、逐一お話しせよ』と、お頼みになり、亦、遺品をお届けするようにと先祖伝来の太刀一振りをお渡しになりました。

これが先程お話しした吉志田村へ尋ねて来た大工で御座いますが、父の戦死を知りながらも家族の前では有体には話し難く、手負いとのみ告げたのでありません。然し、家伝来の太刀は遂に持参致しませんでした。

遺品はその他に朱に染まった白毛の采配、懷中時計、

腰下げ胴乱、三徳（紙入れのこと）の四品を和田様から渡されました。紙入れの内には父が自筆の名札五・六枚、それに、『見守りに為る故常に肌身話さぬ様に』と、出陣の時祖母より渡された鏡、之は父が京都から土産に買つて来られた物であります。その鏡が、敵弾に当たりまして、三つ程に割れて居ます。正しく祖母の言葉通り一弾は此の鏡で受け止め命を落さず、見守りの役目を立派に果したものだと思われまふ。

この様に、父の形見の品々を眼の辺に見せられ、しかも父の肉筆血痕の品々を目前に、討ち死にの有様を和田様から細々と聞かされまして、あらたに湧き上る悲しさやる瀬なさに泣き明かしたので御座います。

其処で亦、難題が起りました。和田様は父の遺言に、『分家の男子を養子にせよ』とあるから、自分が仲人となり急ぎ取り運ぶようにと申されました。然し、一時の同居にさえ、非道の行いがあり、一家が苦しめられた分家の者だと思いますと、誰も賛成致しません。然し、父の遺言には背く事が出来ず、亦仕切りに和田様がお勧めになるので、嫌々ながら養子に貰う事に決めました。

絹の話 (51)

「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

絹の省エネ

【清潔癖の日本人】

昨今の生活の衣食住を見渡すと抗菌、消臭、防紫外線等をうたった商品で溢れています。

一般的に消費者は効果的な数値が高い方を選択し、より安全で健康が維持出来ると信じている様で、ブランドのあまり感心しない素材の衣類が高くてよく売れるのに似ています。殆どの量産商品は作る側の論理、都合で消費者側の都合（こだわり、不安等）を販売戦略の中で取り入れて行きます。ですから時代と共に声高にアピールする事柄は変わって行きます。

生野菜の多くがハウス栽培で、土を使わない栽培もあります。土や水にはその野菜があらかじめ必要とする養分が配合され、温度、照射（非直射日光、人工灯）などで管理され、一定品質な物を一定時期に一定数量収穫出来る様にプログラム化されています。ニワトリばかりでなく、魚も花もそうなって来ました。高価な霜降りの牛肉などは軟らかなだけで、牛本来の香りが有りません。

人の味覚も感性も企業によって作られるものになって来ました。気がつけば人そのものもプロイラー化して来たのでしょうか。

便利というそれらの事をなす為には知的、物的に大変なエネルギーを消費しています。

それらの産物は人の健康を支える繊維質やミネラル、酵素等露地物に比べてどれほど含まれているでしょうか。人がより健康で生活する為には計量出来ないほどの僅かずつ多彩な栄養素が必要なのですが。管理作物にはそれ等が不足しています。

昔の人は自分の住んでいる四里四方の物を食べるのが無病息災のコツと言っていました。農作物は同じ物でもその土地によって、それに含まれる栄養素は僅かずつ違うからです。

人は生活空間、体内に無数の菌や酵素の相互のバランスで生きています。

過度な清潔癖は多大なエネルギー消費をして、環境破壊に繋がっています。その結果、原子力の様な制御困難なエネルギーにも頼らなければなくなっています。

【野蚕繭の生き様】

自然界の野蚕はどうでしょうか。

野蚕の多くは1年に1回繭から羽化し、産卵して子孫を残そうとします（同時に産卵されたものでも2年繭で休眠するものも有る）、春秋2回のもの、青い葉が常に有る赤道直下の無休眠のもの（繭を作ると直ぐ羽化し休みなく子孫を増やす）、など生態は様々ですが、いずれの繭も動けない蛹が羽化する迄の揺り籠で、大切な生命維持装置です。

この生命維持装置は徹底した省エネ装置です。

先ず、太陽光の紫外線によって遺伝子の異変が起きない様にする（ヤマ繭が科の繭）糸の構造に注目です！
やつと目視出来るほどの細い糸に数百個のナノ構造の穴が有り、その穴の中は絨毛で覆われています。

そこに当たった紫外線を80%弱反射し、20%弱吸収し熱に換えてしまいます。（放温構造が熱の上昇を防いでいる）さらに、野蚕は茶（タンニン）や緑（フラボノイド）、黄（カロチン）等、環境に合わせた色で身を守ります。

種類によってはその上を石灰分の粉で覆うものも有ります。茶系のものは糸の外側のセリシン部分に大量のタンニンと糸の中心部のフィブロインにも少量のそれを含ませています。それでも100%紫外線を遮蔽している訳ではない様ですが遺伝子の異変が起きなければ余分なエネルギーを使って過度の構造を作る必要はないからです。

同じ様にこの構造は外気が高温の時も何とか繭の中が21℃～33℃を保てるよう働いています。保温、放温効果です。雨期に長時間雨に濡れても速乾性を發揮して、繭の中の湿度を適度に維持管理します。

また戸外では雑菌の侵入も防がねばなりません。糸の構造だけでは雑菌の侵入は防げません、糸を作っている18種類+aのアミノ酸（繭の種類によりアミノ酸の構成比率は異なる）の働きと色素の働きによって付着した雑菌の繁殖を抑止しています。雑菌が増殖して生命に危険を及ぼさなければそれで良いという訳です。

さらに虫が好まない色素で防虫し、鳥獣には破る事が出来ない固い繭で身をまもります。

自然界では一斉に羽化すると絶滅の危険が有りますので、バラバラと2年にも渡って羽化し危険を分散します。その様な知恵をどのようにして取得したのでしょうか。

この様に長い間、他からのエネルギーを導入せず持ち合わせた自己のエネルギーと構造のみで生命を維持させてゆく省エネ装置には多く学ぶべき事が沢山有りそうです。昨今昆虫機能研究は人の宇宙旅行を先端にあらゆる分野で取り組まれています。

物理学者と詩歌の世界 (61)

一 石

ソール・パールマッター

ソール・パールマッター (Saul Perlmutter, 1959-) は米国の宇宙物理学者。イリノイ州の生まれ。ハーバード大学で物理学の学士 (1981)、カリフォルニア大学バークレー校で博士号 (1986)。「超新星宇宙論プロジェクト」代表。ローレンス・バークレー国立研究所およびカリフォルニア大学バークレー校宇宙物理学教授 (参考資料1)。

パールマッターは、遠方の超新星観測により、「宇宙の加速的な膨張」を発見した功績によりB・シュミット (注1) とA・リース (注2) と共同で2011年のノーベル物理学賞を受賞した。その他、2002年にローレンス物理学賞、2006年に天文学のShaw賞 (シュミットとリースと共同受賞)、2015年に基礎物理学のブレイクスルー賞 (シュミットとリースと共同受賞) などを受賞している。

私たちの宇宙がビッグバン以来膨張し続けていることは、1929年にE・ハッブルが、銀河の観測の結果から発見して以来わかっていた。その膨張の勢いが宇宙に存在する物質の重力によって衰えるどころか、むしろ加

速している (つまり速度を増しながらどんどん宇宙が膨らんでいる) ことを観測から明らかにしたのがパールマッターたちの功績。これにより「宇宙の膨張が加速を続けているとすれば、宇宙の膨張速度は際限無く速くなってゆく。そして、はるか遠い未来に宇宙は無限の大きさになり、宇宙の全ての物質は、バラバラになって引き裂かれてしまう (ビッグリップ)」ことが明らかになった。

この発見には、Ia型超新星と呼ばれる天体がかぎとなった (注3)。求められた距離と、天体が観測者から遠ざかるスピードが速いほど波長が長く伸びる「赤方偏移」の測定値を組み合わせることで、宇宙の時代ごとの膨張スピードがわかる。パールマッターらのチームは1998年、この原理を利用して、宇宙空間が加速的に膨張していることの観測的な証拠を見出した (注4)。もともとは膨張速度の衰えを計測するつもりで観測を行っていたので、この研究結果は当時衝撃的なものだった。

加速膨張のしくみを説明する説の1つが、通常の物質とは違う性質を持つ「ダークエネルギー」が宇宙に満ち満ちているとする説が有力である。ダークエネルギーは空間に付随するエネルギーだと考えられている。すなわち、空間が膨張すればするほど、空間の体積が増えてダークエネルギーの総量も増え、宇宙を膨張させる力が増す。

一方、宇宙の膨張を食い止める力の源となる質量をもった物質は、空間が増えても一定のまま。ダークエネルギーの存在は、2001年に打ち上げられた探査機WMAPによる宇宙背景放射の観測や、銀河団や重力レンズの統計的研究によって確定的とされている。WMAPの研究成果によれば、宇宙全体のエネルギーに占めるダークエネルギーの割合は実に74%に達する。残りの22%はダークマターで、ふつうの物質は全体の4%に過ぎない。今のところ、このダークエネルギーの正体はまったく不明。現在、その性質を知るための研究が、観測および理論の両面から盛んに行われており、その成果が待たれる（参考資料4）。

注1

ブライアン・シュミット (Brian Schmidt、1967ー) は米国モンタナ州の生まれ。アメリカ・オーストラリア国籍。アリゾナ大学で物理学と天文学の学士(1989)、ハーバード大学で天文学修士(1992)、博士(1993)。「高赤方偏移超新星探査チーム」代表。オーストラリア国立大学特等教授（参考資料2）

注2

アダム・リース (Adam G. Riess、1969ー) は米国ワシントンDCの生まれ。MITで学士(1992)、ハーバード大学で博士(1996)。ジョンズ・ホプキンス大学および宇宙望遠鏡科学研究所宇宙物理学教授（参考

資料3）

注3

Ia型超新星とは、白色矮星と呼ばれる星の燃えかすのような高密度の天体が、核反応が暴走することで爆発して明るく見える天体。ピーク時の明るさがどれも同じであるため、地球からの見かけの明るさと比較することで距離を測定することができる。

注4

パールマッターは「超新星宇宙論プロジェクト」のチームを率い、シュミットとリースは「高赤方偏移超新星探査チーム」を率いた。2つの実験チームは、遠方のIa型超新星爆発を多数観測し、その明るさがこれまで考えられていた減速膨張宇宙からの予想より、暗くなっているという事実を突き止め、宇宙が加速膨張をしていることを発見した。1998年、2つのチームはほぼ同時にそれらの研究結果を発表した。

参考資料

- 1) Wikipedia, the free encyclopedia : Saul Perlmutter
- 2) Wikipedia, the free encyclopedia : Brian Schmidt
- 3) Wikipedia, the free encyclopedia : Adam G. Riess
- 4) 宇宙情報センター http://spaceinfo.jaxa.jp/ja/dark_energy.html

短歌に詠まれた茂吉―あるいは茂吉を詠んだ歌人―

「月虹」 鮫島 満

二十二 板垣家子夫 1

板垣家子夫は、昭和二十一年、山形県大石田の聴禽書屋に移居した後の茂吉の身辺の世話をしたアララギの歌人である。板垣は「斎藤茂吉先生に初めてお会いしたのは」昭和六年九月十七日で、芭蕉翁真蹟を見るため来町、旅館に一泊された朝であつた（『礫底』後記）と記している。その後昭和八年以来茂吉の指導を仰いだ。

熱高く臥せる君を思ふとき罪さるるとも早く帰れたし
昭和二十一年『礫底』

題詞に「事ありて」「折しも斎藤茂吉先生重病に臥して、山口茂吉氏来訪中なり」とある。すなわち、続く「身の証たつもたたぬもよしゑやし吾を陥せる力を憎む」「山口氏が残して行きし竹皮に握飯をつつみ警察に行く」によってわかるように、自身が警察に引かれた時の歌である。茂吉はこのとき左湿性肋膜炎を患つていて、約二ヶ月間を床につくことになる。

この山にふたたび君は登らざらむ臂を押しつつ寂しむ吾は
同

この山は黒瀧山である。題詞に「九月八日、斎藤茂吉先生に従ひて登る。二藤部兵右衛門小山良平両君同伴す」とある。上句からは茂吉の病後の衰えが読み取れよう。この時茂吉は「黒瀧の山にのぼりて見はるかす最上川の行方こほしくもあるか」「年老いてこのみ寺にのぼれりとおもはむ時に吾は楽しも」（『白き山』）と詠んでいる。この寺はこの山にある向川寺である。題詞中の二藤部兵右衛門は茂吉の暮らす聴禽書屋の家主である。

この月二十四日には画家の金山平三と堅吾沢に行く茂吉に二藤部と共に随行して、「昨の夜の風のままなる朝明けをものはら渚に汐汲む少女」と詠んだ。これに照応する茂吉の歌に「わが友は潮くむ少女見しといへどわれは見ずけりその愛しきを」がある。

小国川の清き早瀬に來し鮎が串に焼かれて朝市に出る
湯の中に皺立ちし腹撫でる給ふ君が一生にわれは触れしか
峡の温泉に病みし命養へる師とありありて三夜のたふとし

山形県最上町の瀬見温泉での歌。題詞に「斎藤茂吉先

生に従ひ三泊す」とある。思えば、茂吉の数泊の小旅行の度に随行する板垣の労力もなまやさしいものではない。一首目は瀬見温泉の近くを流れる小国川の鮎を詠んでいる。この時の茂吉の歌に、「小国川^{はな}迅きながれにゐる魚をわれも食ひけり山沢びとと」「この鮎はわれに食はれぬ小国川の蒼ぎる水に大きくなりて」（『白き山』）があり、板垣は、茂吉の大石田移居中のことを記録した著書『斎藤茂吉随行記』に、

夕食の時、主人が鮎を持って挨拶に来た。菅野君のお蔭である。だが、鮎はあまりうまいものではない。季節中獲ったばかりの鮎の味を知っているものには食えぬものである。ただ季節過ぎの鮎が珍らしいというだけである。それでも、先生はうまいうまいと食っていた。

と書いている。

二、三首目には茂吉に従って世話をすることの喜びが詠まれている。二首目の歌の製作過程については、温泉に浸かりながらの会話に次のようなことがあったらしい。茂吉「板垣君、お蔭で病氣も快くなり、これこれとお腹が膨れて来たつす。どうだ、まさに相撲取りみたいだんないがつす」、板垣「まだ相撲取りにまではならないけれど、（中略）六十五歳の茂吉先生では老の皺腹ともいふべきところだかなあ」。この「老の皺腹」をほめられた板垣がその場で二首目を作ると、茂吉は感心して、「部屋に行ったら、君忘れぬうち書き留めておくよ

うにし給え」と言ったというのである。これは『斎藤茂吉随行記』に記録されていることである。

湖岸の白き砂^{いさご}を君は手に掬ひて儂ぶ亡き友をもら

昭和二十二年『礫底』

六月、秋田県横手に平福百穂の墓参をする茂吉に結城哀草果と共に随行した時の歌。これは百穂の歌碑の建つ田沢湖が舞台である。ここで茂吉は、「この町に君を悲しむしこと思へば十五年の時日^{とき}みじかし」「健かに君しまさば二たびも三たびもわれを導きけむか」「年老いて苦しみとも相ともに仙巖岬も越えにけむもの」と詠んでいる。この一首目の「この町に君を悲しむしこと」は、百穂が昭和八年に床に臥してから死去するまでの約一週間を看病したことを詠んでいる。

洋傘を曳きずり歩む先生に従ひ来にき十八年前

昭和三十九年『礫底』

横手、田沢湖を巡り、十八年前に茂吉に随行したときのことを偲んでいるのである。十八年前、板垣は「湖岸^{うみぎし}に百穂先生の歌碑あればや舟寄せて下りる四五人」と詠んだが、今回は「われひとり再び来り湖岸の百穂歌碑の杜目ざし行く」と詠んでいる。

楽しい時間 27

山本紀久雄

2014年12月31日

「ミャンマービジネス視察旅行会・2014年11月11日（火）15日（土）」へ参加、その二回目の報告です。

「ミャンマーは右側通行」

ヤンゴン国際空港に着くと、ガイドが出迎えてくれ、バスに案内される。添乗する若者がバックを受け取ってくれ、最後尾のところと並べる。バスの最後尾にはドアはない。どうするのかと見てみると、最後尾側面上部の窓を開け、そこからバックを持ち上げ入れ、後部座席の上に並べていく。

通常、バスにはバック保管スペースがついているはずで、大体バス床面下にあるが、このバスは小型なのでバック保管室がないのだ。改めてバスをみつめると、前面フロントに「濃尾バス」と書かれている。「濃尾バス」とは濃飛乗合自動車のこと、岐阜県高山市に本社を置く乗合バス・貸切バス事業を主に行う会社である。ここがミャンマーで営業しているはずはない。勿論、中古下取りしたもののがミャンマーに輸出されたのであり、同



様に「Canon」「○○自動車教習所」「○○土建」「○○食品」等、日本車であることがブランドであるかのように、日本の社名をつけたままに走っている。

ということは右ハンドルのままであるということ。ミャンマーは右通行であるから、これからヤンゴン周辺を走り回る「濃尾バス」に乗るためには、その都度、道路の真ん中に出て、つまり、車が走ってくる車道側から乗車することになる。当然に危険である。これが結構怖い。日本でも他の国でも経験したことがない。

その右走行ルールの国に右ハンドルの日本車を輸入した理由は偏に性能である。日本車は「壊れにくく、高品質で、最高に安全」というのがミャンマーでの評価である。ミャンマーの自動車登録台数は360万台（2012年11月現在、ミャンマー統計局）。このうち90%が日本車だという。

「ミャンマーの鉄道」

ヤンゴンで夕食を一緒にしたソウさん、日本語は日本人並みなので、いろいろ伺っていると日本の鉄道車両の輸入を行っているという。このソウさんが12月12日のNHK朝7時ニュースに登場した。朝ドラ「あまちゃん」がミャンマーで放映され、三陸鉄道の車両が市民に親しまれ、日本の車両は、生活の足として、現地の人には快適性が高く人気があると語っていた。



【チャットでの支払は不可能】

訪問したカーディーラー、社長は三年前まで米・豆の貿易業だったが、中古車販売がOKになってこの会社を始めたとのこと。中古車と並んでトヨタのカムリ新車が展示してある。価格は1200万円とのこと。日本ならハイブリッド車のカムリが320万円だから、3.75倍もする。関税が高いとの説明があり、購入者の支払いは現金でするのが90%とのことだったが、銀行振り込み制度が整っていないミャンマーでの支払いは大変だと思う。

車代金はドルで支払うのだが、これを仮にミャンマー・チャット(Kyats)で払うとしたらどういう事態になるか。為替は1ドル＝1032チャット(2014/11)だから、1200万円は1ドル＝118円換算で約10万ドルとなるので、10万ドル×1032＝10320万チャットが必要になる。ミャンマー紙幣の最高額は1万チャットだから、1億320万枚の紙幣。したがって、人間が数えるのは事実上難しい。ドル紙幣での支払いになるわけである。

【宇宙の出来事】

ヤンゴン市内ではオートバイの姿は見えない。あまりにも車が多く、渋滞が酷いので、ヤンゴン市内でのオートバイは禁止である。これがベトナムとか他の東南アジア諸国との違いである。ヤンゴンには地下鉄等の公共交通機関がない。したがって、ヤンゴン市民は車かバスを利用することになるが、ここでは交通ルールは無きが如くで、もしかしたら本当にないのかもしれないが、荷物を持った女性や、高齢者が道路を堂々と車が走り充滿している道路を横断しているので、これ

では交通事故が多いだろうと想像することになる。

しかし、各地「濃尾バス」で走ったが、どこにも交通事故の姿は見かけなかった。特に最終日は、郊外の縫製工場と米穀倉庫を視察すべく向い、帰りに日本人墓地にお参りし、ここから空港へ向かったが、この時の渋滞は凄かった。

幹線道路を通ったのだが、乗用車とトラックとバスとが入り混じり、それらが我先にと先を争って割り込んでくる。セインターラインオーバーなどは常識で、対向車線に車が見えないと、後方から必ず車が車線変更して走ってくる。二車線の対向車線は、車線変更車で一車線道路と化す。果ては工事中の歩道にまで車が乗り上げ走っていく。

日本人の感覚ではとても理解できない光景が目の前に展開されていく。整然と走る日本の道路状況を見慣れた我々には「宇宙の出来事」にしか思えない風景が現実である。

【ミャンマービール】



初めて飲む「ミャンマービール」の美味さは予想を超えた。日本のような缶ビールにはお目にかからず、ミャンマーは瓶ビールである。やはり缶と瓶では味わいが違うと再認識する。その瓶ビールを、ウェイターが瓶ジョッキに注いで運んでくる。一口飲んで「コクがあり味がしつかりして、喉ごしも良い」と感じた。アルコールドegree数は5%、大瓶1本640ml。モンドセレクションで金賞7回や世界ビールカップ何回も受賞している。これもミャンマーの楽しみだろう。

石

豊川 夏目勝弘

隼がまた新たな旅に出た。岩石を求めて宇宙に、そのニユー
スを見て石って何だろうとふとは思った。

人間がこの地球上で生活を始めたときから生活道具の多く
は石にて作られていた。石器時代があるように。

満天に耀く星ほしも、多くは岩石が主であらう、七十億の
人間が生きているこの地球も主は岩石でできている。

人間の欲望をかきたて惑わせ金銀・宝石類も石であり、石
油すらも岩石から採掘している現状。

石とは何者なのだ、大辞典には（山の骨）とあり偏に石の
付く漢字は大辞典には百二十二余造りを入れると百三十余字
になる。

石に対する思いは、父親と石垣を積むために川より石を数
年かけ集め運び、屋敷の石垣を積んだことである。

中学生の夏冬の春の休暇には、護岸のためにジャカゴに詰め
る石を集める仕事もした。

金銀宝石から畑の厄介ものの石ころまで身の回りにいくら
でもある石その石が現代の文明等の礎になってきたことに間
違ひはない。

石に対する人間の思いに接し方等を萬葉集で見てみることに
する。

万葉集にどのくらい石、岩を使った歌があるか調べてみた。

初句では五十八首、この句は二十九首、三句三十三首、四
句十一首、結句三首。おおよそ百三十四首、正確に数えればもつ
と多い。

初句の例

○石見のや高角山の木の間より我が振る袖を妹見つらむか

柿本人麿（巻二 132）

○岩ね踏みへなれる山はあらねども会はぬ日まねみ恋ひ渡る
かも（巻十一 2422 物に寄せて思いを述べた歌）

○石はしる垂水の上のさわらびの萌え出づる春になりける
かも（巻八 1418・志貴皇子）

二句の例
○来る道は石踏む山のなくもが我が待つ君が馬つまつくに
（巻十一 1421）物によせてのべた歌

三句の例
○常磐なす岩屋は今もありけれど住みける人ぞ常なかりける
（巻三 308 博通法師）

四句の例
○かくばかり恋ひつつあらずば高山の岩根しまきて死なまし
ものを（巻二 86 磐姫皇子が天皇を思つて作られた）

○秋されば霧立ち渡る天の川石並み置かば継ぎて見むかも
（巻二十四 310 七夕の歌）

○こもりくの初瀬小國に妻しあれば石を踏めどもなほぞ来に
ける（巻十三 3311 問答歌）

結句の例
○足姫神の命の魚釣らすとみ立たしせりし石を誰見き
（巻五 869）

○年月もいまだ経なくに明日香川瀬々ゆ渡しし石橋もなし
（巻七 1126・古里を思ふ）

○我が恋ふる丹の穂の面々今宵もか天の川原に石枕まく
（巻十 2003・七夕）

短歌の表現上では、上の句は地名等名詞が使われている。

下の句は四句では少し思いを入れた使い方として結句は作
者の強い意志が感じられる。

これは短歌的な見方ではあるが、石に対する思いではなく、
すべてにおいて短歌的表現ではこうなると思う。

石についても少し調べてみることにする。

「氷魚」のことから (169) 岡本八千代

もうすぐ平成二十七年になる。——朝からの来客にもほどほどに、私の六畳の間にこもることができた。ああ、いい、こうしてペンをもつて、何かを書くこととすることが……。

東の窓に稲生の海の方へ、白い淡い雲が流れてゆくのが見える。だんだんと心がしみじみとしてくるようだ。やはり子規のことが浮かんできくる。

・子規は明治十二年（十三歳）に秋山中学校へ入学した。その頃最も親しかった友だち五人かいた。太田柴州（正躬）、竹村鍊卿（鍛）、三並松友（良）、安長松南（知之）そして子規の五名であつた。

・五人の中の三並良さんが、子規の又従弟であり、子規全集別巻三回想の子規二に「少年時代」を載せている良氏である。

・この頃の中学は、変則中学校といわれた。それは英語を変則で教え、訳読を主としていたことらしい。名県令と称して岩村高俊という人が創立した。

・上級ではギゾウの文明史、ミルの代議政体、ルソーの民謡篇などを讀んだり演説の稽古などをやったりした。三並良氏は半年で、県立医学校へ転校した。

・子規は或る夏、コレラ病に罹ってしまった。岩村県令もコレラにかかった。しかし、子規も県令も快癒した。

・子規たちの中学時代は、県会が開設されてから間もない

時だったので、県の布告を印刷したり、「日刊新聞」「海南新聞」を発行したりした。

・板垣退助の同志社一派の雄弁家が土佐から来たりして政談演説会も開催された。

・松山は新思想による政治熱に浮かされたりしたためか、大人に真似たか、中学の課業を休んでは、県会の傍聴に行ったり演説会にも出かけたりした。子規も公開ではなかったが盛んに演説をやった。

・三並氏はいう。子規などと話し合った、「青少年は何か不可能そうなことに憧れるものである。或は幽邃な山の中に住んで見たいと思ったり、禁固に処せられたいなど考えたのである」などと。

・彼らの少年時代は、「ちよど廢藩後なのでなにもかもが、新んき時き直しのときで、舊いものは倒れても新しいものまだ出来かけだった」と時勢をとらえていた。

・武道などは、教える人もなく、習いにゆく人もなくなってきた。

・士族の生活はだんだんと苦しくなった。松山には、能芸の達人がたくさんいたので、士族の人たちも芸への生活へと考え出し、能芝居が興行されだした。

・五人の友は士族の子弟として、撃剣の稽古をした。撃剣家は撃剣芝居をやったので、子規もよく見に行った。良氏「子規は決して女のような男ではなかった」と。

（次回へつづく）

ことのはスケッチ(434) 今 泉 由 利

『天田愚庵』

毎月々、上野文化会館に於て「山岡鉄舟研究会」の講義を聞かせていただいている。山岡鉄舟、清水次郎長、由利滴水、正岡子規、夏目漱石：そのつながりに、和歌、漢詩に優れる「天田愚庵」の存在。偶然、ニコライ堂へ行ってみたり、遠くはあるが身内が戊辰戦争に直面したり。『天田愚庵を自身に教えるに』書こうと思ったちました。

天田愚庵は、1854年（安政元年）磐城平藩士の家に生まれ、1868年戊辰戦争において磐城國も戦場となり、兄が出陣、愚庵15歳で出陣も仙台へ落ち延び、父母妹らは行方不明となる。

1871年に上京し、神田駿河台のニコライ神学校に入る。縁あって山岡鉄舟の門下となり、国学を学ぶ。東海道、中國、九州を歴訪、長崎滞在中に、佐賀の乱が起こり、牢につながるが、獄中で歌人の丸山作樂と出会い、短歌、国学を学ぶ。

鉄舟の勧め、清水次郎長に預けられ、1881年次郎長の養子となり、次郎長の経営する富士山裾野開墾事業に尽力するが不振を極め、養子を辞し、天田姓にもどる。

鉄舟の紹介で京都林丘寺の由利滴水禪師のもと、参禅し、禪僧となる。京都清水産寧坂に草庵を成し、愚庵と号する。

1896年、正岡子規を病床に見舞う。

愚庵の庵に長く滞在した桂湖村が帰郷するにあたり、園中の柿15個と松茸を彼に託して子規の病床に届けた。愚庵は、子規からの便がないことに、

「まさをは、まささくあるか かきのみにあまきともいはず、しづきともいはず」

子規は愚庵に、
「みほとけに そなえし柿の あまりつくらん我にぞたびし
十あまり五つ」

「柿の実の あまきもありぬ かきのみ の 渋きもありぬ し
ぶきぞうまき」

「柚味^み喰^くうて愚庵がもとに茶を乞はん」 子規

「二東の韻に時雨るる愚庵かな」 夏目礎石

戊辰戦争に行方不明になった両親、姉を捜し求め、かねてより鉄舟の「現し身の親に逢うことはもう叶うまい。我が心中に親の姿を求むべきである」との教えに従って、西国三十三所巡礼に旅立つ。清水の産寧坂の庵を出る愚庵は法衣を腰揚げ裾高に着、玉櫛^{たまき}を頂に高く引結び、襖^{たて}子を掛け、櫛^きの撞木杖^{つぎ}をつき、深編笠^{ふかへ}を被ったその顔は、色黒く頬高、眉毛は濃く太く、鋭い眼光があった。

「経もあり仏もあれば我もあり こころのおくに亡^{なほ}人もあり」
「二には父母菩提のため、二には衆生結縁のため」巡礼百日のうち千五十人の結縁を得。愚庵の書き記したもの。

一、道順は先ず伊勢の大廟に詣で、次に熊野三社に参り、然後番号に従い、一番より打始むる事。

一、一箇所に一夜ずつ、参籠通夜する事。

一、札所の外にも、神仏靈場、名山大川は、最寄に従い、成るべく登臨参詣する事。

一、道中はみだりに舟、車、馬、駕籠に乗り、巡礼の本意を失うべからざる事。

つづく

「歴代天皇御製歌」(三十三)

貫名海屋資料館

『一條天皇』第六十六代・在位・九八六年(七歳)——一〇二一年(三十二歳)

一條天皇は、円融天皇の第一皇子。七歳で即位、三十二歳で崩御。一條天皇の御代は、藤原氏全盛であった。後宮を中心として、紫式部、清少納言、赤染御門、和泉式部など女人の文人、歌人が活躍し、「源氏物語」「枕草子」と女流文学の代表作が生まれた。天皇自身も文芸に深い関心を示され「本朝文粹」に詩文を残された。

曾祖父の醍醐天皇、祖父村上天皇のような親政を志され、藤原道長も天皇と協調し、有為な政治体制が確立された。

野辺までに心一つは通へどもわが御幸とはしらずやありけむ

後拾遺集

皇后宮葬送の夜詠まれた。

二葉より松のよはひを思ふには今日ぞ千年のはじめとは見る

続古今集

後朱雀院がお生まれになり、百日目に詠まれた。

編集室だより 二〇一四年 十二月

◆三河アララギ賞 半田うめ子様

わた菓子を子供の頃にて食みし日を思ひだしつつけむり
眺むる

ふうわりとやさしさのなかの思い出が偲ばれます。

○救世観音菩薩立像を彫りはじめる。平安時代の法華経信仰よりの名称、「人々を世の苦しみから救つて下さる仏様。」法隆寺、夢殿の聖徳太子の現し身とされる。

○「シンガポール・シーフード・リパブリック」にて、彫刻教室の会始まって以来二度目の忘年会。「命ある限り彫り続けよう」という友人達にめぐまれた。

○天井と壁の直角になる部分の掃除をした。業者に頼んでみたけれど、「家を空にしないとだめ」をとのこと、自分ですれば簡単だった。

○仕事が忙しい。付き合がある。体調がおもわしくない。などなどキャンセルの友を差し置き、卓球の練習をした。ピンポン球を追う動きに、自らの体調がわかり、続けなければ。

○トレビの四十周年イベント。『最後の丸木舟』『絹の話』の今泉雅勝氏の制作。文部省特選を受けた「トカラ列島伝統

漁法、ナガサイ漁」記録映画を見せていただき、野蚕での物作りの原点を教えてくださいたくのでした。

○たまたま歩いていたらニコライ堂にゆき当たった。堂内にしばらく座って、知り得たこと。

天田愚庵は、磐城平藩士の家に生まれ、15才で戊辰戦争に出陣。戦場となった平城は陥落。愚庵は仙台に落ちのび、父母らは行方不明。1871年愚庵上京し、神田駿河台のニコライ神学校に入る。縁あって山岡鉄舟の門下となる。天田愚庵の跡がありました。

○小石川後樂園、吟行会兼忘年会。すっかり枯れ色の庭園も入ゆくと花も実も鳥達もみんな江戸よりの雰囲気をもって。本当のことは本当に良い。

○外国住いから日本に帰ってきてすぐ、アトリエで出逢い、それ以来、スケッチに出掛けたり、飲みに行ったり、とても沢山一緒に過した友達が、忘年会の帰りエスカレーターで転げ、救急車で運ばれた。ご主人を亡くし、一人住いだから、身につまされる。一ヶ月程の入院が必要と。

○カンナの大家、伊藤さんに三河アララギを届けにうかがうと、階段から落ち、頭部を26針も縫われたと、大変なことになっていらした。ご一緒にタンゴを歌う日を思います。

○ポーラ・ミュージアムアネックス・銀座。レオナルド・フジタ・藤田嗣治・1920年代のパリで「素晴らしい白」と絶賛され、第二次世界大戦後、擬人化された動物、神話のなかの女性像、子どもを主題とする（小さな職人たち）。夢や想像と結びつき、絵の中へそっとお邪魔する：いつまでもいつまでもこのままでいたいほど。

和菓子街道（100）

<http://www.trad-sweets.com/>

平 松 温 子

伊勢街道(23)

以前、大晦日から元旦にかけて、伊勢神宮に参拝をしたことがある。夜道を外宮から内宮まで、参宮街道を歩いたことも、内宮で参拝後に頂いたお餅を、神宮境内の篝火で焼いて食べたことも、懐かしい思い出だ。元旦に神宮の篝火で餅を焼いて食べると、1年、無病息災で過ごせるという地元の信仰があるそうだ。

『和菓子街道』でも、いよいよ伊勢神宮の内宮へ。もちろん、腹ごしらえも忘れない。神宮門前の甘味といって誰もが思い浮かべるのが、宝永4年（1707）から続く赤福だろう。ご存知の通り、赤福餅は餅を餡でくるんだシンプルな菓子だ。幾日も歩いて神宮に参詣する大勢の旅人を待たせないため、少しでも早く、少しでも多く作れるようにと餡で餅をくるむ方法が考案されたのだとか。さっと食べられて腹持ちもいい。



まさに旅のための和菓子だ。今も昔も変わらぬ店頭の賑わいの背景には、旅人のために作るという一貫した姿勢がうかがえる。

餡の表面の筋は五十鈴川の流を、餅は川底の玉石を表している。

◆赤福

住所：三重県伊勢市宇治中之切町26

電話：0596-22-7000

お知らせ

▽三月号の原稿は、二月一日(日)までに、必着、郵送のこと。

※毎月の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。郵便の休配(日曜、祝日)を考えあわせて早目に送付してください。

※掲載ずみの原稿は毎月の三河アララギ誌と共に返送しますので、返送用封筒は不用です。

原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A
〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

編集三河便り

△短歌は万葉集に逆のぼる古いものだと思われてしまっている。考えてみれば、「見る」ということ、「思う」ということが過去のものだろうか、「思い」「見る」ということは時代に関係なく、人間が社会生活をしていくなかで、外せない一番大切なことではないだろうか。

「見る」「思う」は短歌等の文学・芸術に関するもののみでなく、一般の生活のなかにおいても大切な要件ではないだろうか。

「見る」「思う」力をつけるには、文学等を通して力をつけるのが近道ではないだろうかとも思う。

「見る」「思う」術を身につける一つの方法であり、千数百年つづいてきた日本の智慧である。
(夏目)

三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。
◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分一万円、一ヶ年分二万円の割で前納されたい。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様たちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができる。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができる。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十七年一月二十五日印刷 第六十二巻 第二号
平成二十七年二月一日発行 定価 六 百 円

編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘
平松 裕子・山口 千恵子

発行人

今泉 由利

発行所

三河アララギ会

三河アララギ発行所 〒一四一〇〇三二
東京都北区王子本町一の二六の六A
TEL (〇三)五九二四一〇六五
振替口座 〇〇八三〇一六一五六三九
E-mail yuri88@cronos.ocn.ne.jp
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>
印刷所 株式会社 桜 創 美